

「山田美妙集」を推薦する

書齋は戰場なり 嵐山 光三郎

山田美妙は二十歳明治二十年)のときに小説『武蔵野』を「読売新聞」に発表し、言文一致の小説家としてデビューした。二十一歳のときに「夏木立」(短編集・金港堂)、二十二歳で『蝴蝶』(国民之友)、とつきつきに問題作を発表した小説家である。近代小説の文体は美妙によって始まったといつてよい。

しかし、私行上の問題を坪内逍遙に批判されて、以後は不遇な晩年をおくった。「少年名を成すは第一の不幸」で、当代の文壇先輩を乗りこえてトン・トン拍子に名声を博したため敵が多かった。余りに多才多能で、「我楽多文庫」の創刊にかかわった尾崎紅葉とも袂を分ち、ひとりぼっちになった。明治のはぐれ狼である。

はぐれつつも、没する四十三歳まで、小説のほか詩・戯曲・評論・紀行など数多くの名作を書きつづけた。唱歌集・人名辞典・地名辞典・大辞典などの辞典編集でも先駆的業績を残している。

美妙の執筆机の前の壁には「書齋は戰場なり」と書いた貼紙があった。明治の文壇より「消された」美妙の無念を思い、私は「美妙 書齋は戰場なり」(中央公論新社)を書いた。それと同じときに、『山田美妙集』(全十二巻)の刊行がはじまる。没後一〇二年にして、美妙の小説・韻文・戯曲・評論・書簡・日記の全貌が明らかになる。すばらしい!

美妙は、小説家と編集者を兼ねた、明治近代文学の混沌である。地を這うように執筆をつづけた美妙の執念を見よ。これを文学に殉職した人間の姿である。臨川書店は偉い!

この全集が完結するのは二〇一五年一月というから、私もそれを見届けるまであと三年は生きねばならない。泣くな美妙よ、貴兄がベン先に托した言葉の一字くゝが、いまここによみがえる。 (作家)

泉下の美妙にも届けたい朗報

木村 義之

若くして流行作家の地位を獲得し、言文一致運動史に逍遙・四迷・紅葉らと並んで今なお燦然と名を連ねる山田美妙には、その仕事量に見合う規模の著作集が刊行されておらず、本文の分散には不便を感じていた。立命館出版部の『美妙選集』は種々の事情から選に漏れた作品も少なくない。また、山本正秀編『近代文体形成資料集成』にも美妙の重要な評論は収められているが、すでに絶版となつて久しい。こうした美妙の扱いをかねて残念に思つていたところ、このたび大規模な『山田美妙集』が刊行されるとの朗報が届いた。

日本語学の立場からすれば、日本語として遺された資料は当期の日本語を知るための立派な研究素材であり、作家の評価や文学的価値云々はひとまず問わないがルールである。美妙の著作の数々は明治期の日本語研究の進展にも資するところ大であろう。もちろん、これまでも日本語学の分野では、美妙の言文一致論とその実践を近代口語文成立史の中に確たる位置づけを行つてきたし、東京アクセントを記述した『日本大辞書』にも近代国語辞書史上の画期的な試みとして評価を与えてきた。しかし、言文一致体小説としての価値は『浮雲』がリードし、辞書の完成度でも『言海』に及ばず、という世間の評価が定着していることもたしかで、総体的にはマイナスイ面に言及されることの多い美妙に対して、私はやや同情的であった。これには評価が高まらない種々の原因もあるかもしれないが、それでも私は異能の人としての山田美妙に人間の興味を持つてしまふ。かつて、早稲田大学図書館、本間久雄文庫に収められた美妙の自筆草稿を調べていたとき、反故紙と見紛うほどにびっしりと書き込まれた草稿の一葉に「睡魔」と墨書された落書きの二文字が今も鮮烈な記憶として残っている。夜を日に繼いで言葉と格闘する美妙の姿を想像しつづ、伝えられる小器用な作家といった美妙像とは異なる面を見出したように感じたからかもしれない。

だから、没後百年を経て本格的著作集が刊行開始となることを、真つ先に泉下の美妙に伝えたい気がする。 (慶應義塾大学教授)

もたらされる恩恵

境田 稔信

山田美妙は文学者として有名であるが、国語学者でもあった。言文一致や句読点類の使用といった日本語表現の変革期に直面し、数々の持論を発表・実践している。また、辞典の編纂も手がけ、『日本大辞書』『日本地名全辞書』『万国人名辞書』『帝国以呂波節用大全』『漢語古諺熟語大辞林』『新編漢語辞林』『大辞典』などを出版した。たとえば『日本大辞書』を見ると、句点と読点の中間的な「白ゴマ点」を使つていたり、疑問符・感嘆符を古典の引用文にまで加えることをしている。日本で初めてアクセントを表示した辞典であり、口述速記によつて原稿が作られ、口語体の語釈も初めてだったから、かなり革新的である。しかし、文学以外の活躍について詳しく書かれたものは珍しく、一般にはあまり知られていない現状にある。美妙の全容を知るためには原資料を一つ一つ探し出す必要があるが、一部の専門家を除いて縁遠いものになっている。それがこの『山田美妙集』において、小説類のみならず、評論・随筆・書簡・日記等にいたるまで、まとまった形で収録されるという。刊行された晩には、おおいに美妙への理解が深まることだろう。どんな研究においても原典を確認することは欠かせないものだが、まずは『山田美妙集』があれば、容易に全体像を把握することができるのである。研究者にはもちろんのこと、近代文学に興味をいだく一般読者にも、基本的な文献として多大な恩恵をもたらすのは間違いない。 (日本エディタースクール講師)

真の美妙復権に向けての果敢な試み

中島 国彦

山田美妙は「です」、二葉亭四迷は「だ」、尾崎紅葉は「である」——このようなことを、高校三年の時、耳にした。言文一致文体の創出に関係する知識だが、それが美妙の名を知った最初である。戦前初刊の岩波文庫は絶版、昔出た『美妙選集』二冊は古書価が高く、図書館で見られない。その後、講談社版『日本現代文学全集』、筑摩書房版『明治文学全集』などの『山田美妙集』で、主要作品を読むことが出来た。『武蔵野』『蝴蝶』などの有名な初期作品は比較的読みやすかったが、文学史的に重要な文学作品であることはわかつていても、その他の作品を眼にする機会が少ないため、位置取りがなかなか定まらなかつた。文才は理解出来ても、文末の「です」には、ゆるみがあり、句点の後の一字開けも、どうしても親しめない。美妙にとつても、そうした外面は損ではないか、と思つた。

美妙復権の動きが出て来て、嵐山光三郎・山田篤朗氏の著書も出た。筑摩書房の『明治の文学 山田美妙』も、うれしい一冊だった。が、復権が外的なものでないためには、言葉の内実、その文学性に向けての検証が欠かせない。その第一歩が、二〇一〇年秋に日本近代文学館で開催された「草創期のメディア」に生じて、山田美妙没後一〇〇年「展」であった。テキストの整備が進めば、真の復権が必ず実現する——三か所に分散されていた資料が一堂に会するというドラマに立会い、十川信介氏を中心とした編集委員の努力を目の当たりにし、そう確信した。十川氏が新しい岩波文庫を編み、「いちご姫」も簡単に読めるようになった。批判を受けながら「です」にこだわつた美妙の、文体・語りの構造や人物像のエネルギーにも、新しい証明が当てられた。雑誌『文学』の新しい特集も、刺激に満ちている。深い知見を持つ多くの編者に恵まれて今こそ、美妙復権への好機に違いない。先ず美妙を虚心に読むこと——それを実現させてくれるこの企画が、近代文学研究全体をも充実させてくれることを、本当に幸福に思う。 (早稲田大学教授)

全12巻 各巻の主な収録内容

第1巻 小説1: 初期文集

(山田俊治・十重田裕一)

「嘲戒小説天狗」「風琴調一節」「武蔵野」「花の茨、茨の花」「籠の俘囚」「玉屋の塵」「花ぐるま」「蝴蝶」ほか 明治19〜22年頃の小説／「豎草紙」「演劇改良会」「質屋庫開」ほか「我楽多文庫」掲載の小説・韻文・雑文類

第2巻 小説2

(山田有養)

「いちご姫」「まつのしたつゆ」「葛の裏葉」「嫁入り支度」教師三昧」「腕だめし」「白玉蘭」「笹りんだう」「丸二つ引新太平記」「盗賊秘事」ほか 明治22〜24年頃の小説

第3巻 小説3

(須田千里)

「雪折竹」「みみずばれ」「大恥辱」「猿面冠者」「糸犬一郎」「千里駿馬之助」「園の二葉」「無名姫」「鰻旦那」「負傷兵」「里見勝元」「武者魂」ほか 明治24〜29年頃の小説

第4巻 小説4

(関 肇)

「阿千代」「峰の残月」「後の残月」「いのり首」「閻魔地蔵」「たかせ川」「天野屋利兵衛」「小桜鎧之助」「孫右衛門」ほか 明治28〜30年頃の小説

第5巻 小説5

(中丸宣明)

「可憐狂」「少年奴隸」「狼と音楽」「迷耶悟乎」「帝国海軍」「すとらいき」「逆雨順風」「毒筆新聞」「三千号の配達夫」ほか 明治30〜33年頃の小説

第6巻 小説6

(谷川恵一)

「義気の義三」「臣民の情」「子だから」「小夜がたり」「わが妻子」「刺客近藤勇」「女装の探偵」「桃色絹」ほか 明治33〜35年頃の小説

第7巻 小説7

(中川成美)

「比律賓独立戦話 あぎなるど」「漁隊の遠征」「ベネジユラのカステロ」「比律賓の亡命青年」ほか 明治35〜36年頃の小説

第8巻 韻文・戯曲

(坪井秀人・宗像和重)

「新体詞選」「迷の淵」「るウまにあ軍歌」「敵は幾万」ほか 初期文集収録以外の全韻文／「村上義光錦旗風」「六郎大夫命運引」「夢幻日記」ほか 全戯曲

第9巻 日本語表現

(青木稔弥)

「言文一致論概略」「日本韻文論」「日本辞書編纂法私見」ほか 言文一致論、韻文論、辞書編纂法など日本語表現に関する評論類

第10巻 随筆

(宗像和重)

「国民の友三拾七号附録の挿画に就て」「戸隠山紀行」「あぎなるど」の原稿を捧げるに付いての言」ほか 評論・随筆・雑文類

第11巻 書簡・宛書簡・日記

(十川信介)

美妙発書簡・宛書簡の翻刻／青春日記、明治39年、明治40年、明治43年の日記を翻刻

第12巻 著作・自筆資料目録・年譜 収録書目索引

* 配本は巻数順を予定 * () 内は編集担当者 * 内容は一部変更になる場合があります

山田美妙略年譜

慶応4年(二八六)	7月8日、父吉雄(旧南部藩士、母よし(海保家養之の長男として神戸柳町に生まれる。本名武太郎
明治3年(二八七)	3歳 父吉雄、島根県警部として赴任。家族は芝神明前に移転、養祖母マス、母よしと三人暮らし。この頃、尾崎徳太郎(紅葉)と知り合う
明治8年(二八七)	8歳 4月、私立烏森学校入学。12月、公立巴学校転入
明治12年(二八七)	12歳 巴学校卒業
明治13年(二八八)	13歳 1月、東京府第二中学校後の府立一中、現日比谷高校へ入学。紅葉と再会
明治17年(二八八)	17歳 9月、大学予備門入学。尾崎紅葉、夏目漱石、正岡子規、幸田露伴などとともに学ぶ
明治18年(二八八)	18歳 2月、尾崎紅葉、石橋思案、丸岡九華と硯友社を結成。5月、「我楽多文庫」を創刊。一、二集に「豎草紙」発表
明治19年(二八八)	19歳 8月、紅葉、九華と「新体詞選」を編纂。9月、大学予備門退学。この頃から「言文一致」を唱える
明治20年(二八八)	20歳 6月、帝国大学文科大学入学許可。7月、成美社入社。「以良都女」編集に関わる。11月、「読売新聞」に言文一致体小説「武蔵野」発表。12月、「我楽多文庫」に言文一致体小説「花の茨、茨の花」発表
明治21年(二八九)	21歳 8月、「夏木立」(金港堂)刊行。9月、「以良都女」一五号より編集兼発行人。10月、金港堂より「都の花」を創刊。主筆となる。11月、硯友社との関係悪化。「我楽多文庫」から硯友社幹美妙の名前を削除される
明治22年(二八九)	22歳 1月、「蝴蝶」執筆(「国民之友」附録、渡辺省吾の挿絵「裸蝴蝶」が話題となる。3月、神戸平永町九番地に移転。「以良都女」発行所とする。7月、「いちご姫」連載開始(「都の花」、翌年5月まで)
明治23年(二八九)	23歳 10月、「日本韻文論」連載開始(「国民之友」、翌年1月まで、未完)
明治24年(二八九)	24歳 7月、国民新聞社入社、翌年退社
明治25年(二八九)	25歳 7月、「日本大辞書」(日本大辞書発行所)刊行開始。以後、日本語改良のため多くの辞典類を編纂、執筆
明治27年(二八九)	27歳 4月、演劇改良をめぐって、逍遙との間に齟齬。11月29日「万朝報」に女性関係を暴露され、「小説をかくる方便なり」と弁明。逍遙から厳しい批判を受ける
明治28年(二八九)	28歳 4月、「阿千代」(芸芸倶楽部)発表。6月、父吉雄、美妙を廃嫡
明治29年(二八九)	29歳 元旦、女性作家田沢稲穂と結婚。4月、日本橋の芸妓西戸カネを山田家に入れる。8月、フィリピンでアギナルド将兵。9月10日、稲穂、肺炎のため鶴岡で死去。「万朝報」は稲穂自殺と報じる。それによって、多くの発表の場を失い、辞典類の原稿料で生活の糧を得る
明治30年(二八九)	30歳 4月、長男旭彦誕生。9月、養祖母マス、母よしと別居、王子村のちの瀧野川へ移居
明治34年(二九二)	34歳 2月、紅葉と和解。9月、脳充血で卒倒、以後禁酒
明治35年(二九二)	35歳 9月、「比律賓独立戦話 あぎなるど」(前後編、内外出版協会)刊行。12月、日出国新聞入社
明治36年(二九三)	36歳 10月30日、紅葉死去。11月、長女八重誕生
明治37年(二九四)	37歳 1月より死直前まで日記をつける
明治38年(二九四)	37歳 7月、「大辞典」執筆開始
明治39年(二九四)	38歳 10月、三男叶彦誕生
明治40年(二九四)	39歳 1月13日、明治27年11月29日付の「万朝報」を焼き捨てる。3月、叶彦死去
明治41年(二九四)	41歳 大阪の青木嵩山堂より「大辞典」の中止通達があるも、村上浪六の仲介により、7月脱稿。8月から「史外史伝 平重衡」(「やまと新聞」、12月まで)連載。9月、本郷区駒込へ転居
明治42年(二九四)	42歳 9月、身体異状、血痰を見る
明治43年(二九四)	43歳 6月、「史外史伝 平重衡」(今古堂)刊行。9月、咽喉腐爛、頸腺癌腫と診断される。10月14日、石橋思案に「大祖母に圧迫されて硯友社を去つた旨」を話す。妻と子供たちに「遺言状」の下書を書く。同日24日、死去。駒込染井墓地に葬る。12月、「平清盛」(千代田書房)刊行

本著作集の特色

- 収録作品は「小説」、「初期文集」、「韻文」、「戯曲」、「日本語表現」、「随筆」のジャンルに分類し、それぞれ初出による発表年順に編成した。
- 各巻の冒頭にはその時期の代表作となる作品を置いた。
- 底本には、原則として単行本初版を採用した。
- 従来の選集や目録類から漏れた雑文類も可能な限り収めた。
- 初めての翻刻を多く含む「書簡」、「宛書簡」、「日記」は、硯友社同人をはじめ、明治文壇の交友関係を知る重要な資料。